

# 紅い戦争の記憶

旧ソ連・中国・ベトナムを比較する

私たちは物語のなかで生きている。豊かで安全で自由な暮らしを求めるだけでなく、私たちを世界に意味づける物語を欲している。戦争や革命は、新しい社会を支える新しい物語を作り出すとともに、古い物語や個人の物語の再編を促す。社会の凝集性を高めることが一人一人の豊かさを約束するわけではないことが明らかになりつつある今日、国家の記憶、社会の記憶、個人の記憶が互いに交錯するなかで、私たちはどのような物語を紡ぐのか。

〔特集にあたって〕

# 社会主義圏の戦争の記憶を比較する

越野 剛

## はじめに

近年の中国では革命や戦争というきわめて社会主義的な史跡をめぐる観光（レッドツーリズム）がブームとなって商業的な利益をもたらしている（高山二〇一〇）。ロシアの対ナチス戦勝記念日（五月九日）にはソ連時代の軍事パレードが華々しく復活し、現代風にアレンジされた軍歌を人気歌手が観衆と唱和する（Oushakine 2013）。比較的戦争の記憶が新しいベトナムでは戦没者の遺体を探すことが遺

された国民の焦眉の問題となっているが、遺骨を見分ける能力を持つ霊能者の活躍が社会主義国家によって黙認されるという奇妙なねじれが生じている（マラーニー二〇〇八）。中国にとっての日中戦争、ロシアおよび旧ソ連地域における独ソ戦争、そしてベトナムにおける対仏・対米戦争の記憶は、社会主義体制を維持する強力な要因となった。右に挙げた例を見ると分かるように、ポスト社会主義の時代においても、資本主義やグローバルイズムの影響で変質を被りながらも、戦争の記憶が依然として大きなインパクトを持ち続けている。

二〇世紀の前半に起きた二度の世界大戦は、さま

さまざまな地域で総力戦への動員を通じて国家と国民の関係や国民意識に大きな変革をもたらした。多くの研究が指摘するように、西側先進国では総動員体制や戦意高揚プロパガンダなどの非常時体制が戦後の社会や文化に大きな影響を残した。本企画で取り上げる社会主義諸国でもそれは共通しているが、社会主義諸国の場合、その影響の度合が極度に強かった。ロシア革命は第一次世界大戦の渦中で生じ、中華人民共和国の成立は日中戦争の帰趨と不可分に結びついた出来事だった。ベトナムにいたっては第二次世界大戦から対米戦争まで繰り返される戦争のなかで国家建設が行われたとさえ言える。

そもそもソ連の社会主義経済は戦時経済をモデルにして設計されたという側面があり、国家セクターへの国民の動員、プロパガンダと文化統制なども戦争の影響なしでは考えにくい。マルクスが予見したのは近代化された国家における社会主義革命だったが、旧ソ連、中国、ベトナムはいずれも後進地域であった。そのため社会主義化は同時に近代化という役割も担うことになった。そうした「社会主義的近代化」は総力戦における国民の急進的な組織化と一体になって進められた。二一世紀の現在では、社会主義体制が崩壊した旧ソ連諸国はもちろん、資本主

義の導入が進む中国やベトナムでも、冒頭に例を挙げたように戦争の記憶は大きく変容すると同時に、国家や国民にとって重要な意味を保ち続けてもいる。本特集のねらいは、戦後社会の国民統合に大きな影響を与えた戦争の記憶と表象に着目して、旧ソ連、中国、ベトナムという社会主義を体験した諸地域間の差異と共通性を明らかにすることである。

## I 本特集の位置づけ

かつて「第二世界」と呼ばれ、閉ざされているがゆえに、ある種の均質な文化圏をなしているように見えた社会主義諸国は、九〇年代以降に大きな変貌を遂げた。研究者も比較的自由に現地調査ができるようになり、実証的な研究の蓄積がこの二〇年余りで飛躍的に拡大している。しかしそれらの研究の多くは地域ごとの固有性や差異を重視しがちで、地域を越えた共通性に目を向けることは少なかった。ソ連や東欧の社会主義政権が幕を降ろしたのに対して、中国やベトナムが社会主義の看板を掲げ続けていることも、一つの枠組の中でこれらの地域について議論することを困難にしている。

しかしながら旧ソ連、中国、ベトナムは革命と数十年にわたる社会主義体制の歴史を共有しており、その体験は今日の社会においても比較可能な痕跡を残しているはずである。たとえばソ連史家の塩川伸明は社会主義を経験した地域をまとめて考察するため「現存した社会主義」という枠組みを設定し、資本主義・自由主義や開発独裁などの体制間比較に道を開いた（塩川一九九九）。文化人類学の概念を社会主義経済の理解に大胆に適用したその理論は精緻ではあるが、個人による比較研究には限度があり、ソ連東欧以外の中国やベトナムについては表層的な言及にとどまっている。一方でモンゴル研究者の小長谷有紀は東欧、旧ソ連、中国などの地域研究者を幅広く集めて、社会主義諸国の差異と共通性を比較する大がかりな研究を行った（小長谷ほか二〇一〇・小長谷・後藤二〇一一）。小長谷のグループが導入した「社会主義的近代化」というタームは、社会主義革命が西欧先進諸国とは別のオルタナティブな近代化プロジェクトだったという仮定に基づく。複数地域の専門家による共同作業の成果は非常に多面的・包括的なものだが、社会主義圏が広く共有する特徴を浮かび上がらせるような理論的な掘り下げまではいたらなかった。

本特集は旧ソ連、中国、ベトナムという複数の地域研究者が集結することで対象地域の差異や多様性をできるかぎりカバーしつつ、その一方で戦争の記憶という重要ではあるが限定されたテーマを設定することで社会主義体制に共通する特徴を明らかにすることを目指している。

## II 特集の構成

本特集は、旧ソ連、中国、ベトナムからそれぞれ二本の論文を集めた。第一部「刻まれる記憶——紅い戦争のプロパガンダ」では戦争記念碑を中心とした公的な記憶、第二部「紡がれる物語——社会主義と戦争のもうひとつの記憶」ではそこから逸脱するオルタナティブな記憶に重点をおく。ただし各論考は、公式と非公式、パブリックとプライベート、中央と地方、ジェンダーなどの対立項の一方のみを論じるわけではなく（厳密に考えればそんなことは不可能である）、他方との関係性を念頭においた記述になっている。

第一部の前田論文「ロシアの戦争記念碑における兵士と母親イメージ——国民統合のジェンダー・バ

ランス」は、ロシアを中心にして旧ソ連の公的空間における戦争の記憶を規定する戦争記念碑を取り上げ、勝利の顕彰と死者の追悼という二つの機能が男女のジェンダーに応じて配分されていることを明らかにしている。とりわけ顕彰碑としては男性兵士像が、慰霊追悼碑のためには「悼む母」や「母なるロシア」などの母親像が多く採用された。他方で実際に従軍した八〇万にもほる女性兵士は、男性の場合のような勇ましい顕彰碑としては表象されにくかった背景についても考察されている。

高山論文「英雄の表象——中国の烈士陵園を中心に」によると、革命・戦争の英雄（烈士）は、伝統的な死生観によれば不慮の死をとげたために生者に崇りをなす存在であり、その追悼は怨念を鎮める意味があった。革命後の中国は、外国人墓地の西洋様式、ソ連軍兵士の墓と社会主義レアリズム様式、そして碑文などの中国の伝統的な様式を組み合わせて、烈士陵園の体裁を整えて行く。それは社会主義国家の国民統合に利用するための英雄の追悼の近代化・合理化の過程だった。

平山論文「ベトナムにおける公式的<sup>オフィシャル</sup>な戦争の記憶——記念碑と戦争展示をめぐる考察」は一九五〇年代から現在までのベトナムの戦争記念碑および戦争

展示の歴史を跡付ける。伝統的な墓碑の形態から出発した記念碑は、ヨーロッパ風のオペリスクヤソ連風の人物像を受容することで多様化する。しかしソ連の記念碑文化を積極的に受け入れ始めたのは一九八〇年代になってからのことであり、東欧社会主義圏の崩壊とも重なって、負のイメージを残した。ただし二〇〇〇年代以降に再開された記念碑建設はロシアや中国における戦争の記憶の再強化と同時代的なつながりが感じられて興味深い。

オルタナティブな記憶を扱う第二部の越野論文「ハティニ虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶」は旧ソ連の中では周縁部に位置づけられるベラルーシの記憶の特徴を考察する。ナチスドイツによって住民が皆殺しにされたハティニ村は、ベラルーシの戦争記憶の中心に置かれている。虐殺事件の記念碑におけるオフィシャルな集合的記憶のありかたがソ連やベラルーシの全体のアイデンティティに接続されるのに対して、虐殺を体験した個人の記憶が書きこまれたアダモヴィチの文学作品では、恣意的で断片的な一回性の体験が積み重ねられることでオルタナティブな戦争の記憶を提示している。

田村論文「革命叙事と女性兵士——中国のプロパガンダ芸術における戦闘する女性像」によれば、社

会主義体制の中国は京劇を近代化（社会主義化）した「革命模範劇」において、女性戦士の表象をプロパガンダのため大いに活用した。その際には女性表象からセクシヤルな要素を除外することが重要であり、女性戦士の多くは寡婦として描かれる。さらにはその過渡期的形態として、恋愛要素を除いたせいで女性キャラクターのみが増殖する「戦闘少女」と、夫不在のゆえに抽象的な「党」の妻や母を体现する「妻（夫不在）」という二つのタイプに分類することができる。

今井論文「ベトナムにおける戦争の記憶の『社会化』——『捕虜となった革命戦士博物館』の事例を通して」は、ベトナムで初めての「私営博物館」である捕虜博物館に着目し、その設立に関わった捕虜体験者へのインタビュを通して、規範的な戦争体験からは逸脱・屈折した記憶のありかたを分析する。私営の博物館が従来のオフィシヤルな施設とは異なり、公的記憶に収まらない私的な記憶の「社会化」の機能と、逆に公的記憶の社会化を民間に肩代わりさせるといふ二つの機能を持つことを示している。

### Ⅲ 差異と共通性

戦争の記憶研究は日本、アメリカ、西欧、アジア・アフリカの旧植民地などを対象に幅広く行われている。旧ソ連、中国、ベトナムにおいても戦争の記憶の研究は個別に積み重ねられてきた。<sup>\*1</sup> 本企画もその延長線上に位置づけられるものであるが、各執筆者の論考が明らかにするそれぞれの地域の差異と固有性を考慮に入れつつも、地域を越えた比較を意識することによって社会主義圏に共通する固有の戦争表象について考えることもできるはずである。ソ連の対独戦争、中国の対日戦争、ベトナムの対米戦争はいずれも革命の大義をにかけて勝利した戦争であり、戦後の社会主義体制にとって国民を統合するプロパガンダの有力な材料となった。一方で三国とも勝利と引きかえに甚大な数の国民を戦争で失い、プライベートな記憶の領域に大きなトラウマを残した。ファシズムや帝国主義に抗する社会主義体制の正義と勝利を称える一方で、大多数の住民が家族や友人を亡くした喪失の痛みを癒す方策が考慮されなければならなかった。したがって公的記憶の領域に

において顕彰と追悼の使い分けがなされ、たとえば前田論文が指摘するように、ソ連においてはジェンダー・イメージの非対称的な配置となつて表された。

急進的な女性解放政策と戦時中の総動員の相乗効果により、大量の女性が従軍したことも同時代の他国の軍隊と比べて社会主義国家に顕著な現象であった。女性兵士は戦後の公的なプロパガンダでは英雄として積極的に称えられる一方で、家庭や職場においてはジェンダーの侵犯者として排除される傾向も見られた。女性や少数民族などの社会の周縁的な存在が平等な国民の地位を得て動員・統合されていく傾向は、多くの近代国家で見られるが、社会主義圏においてはその変化が急激であり、しばしば極端な結果を生み出した。さまざまな異質な要素を統合しようとする政治的力学は、同時に内部から異質な分子を選び分けて除外しようとする反作用をも示す。ベラルーシの作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチが発見したソ連軍の元女性兵士の語りもまた、戦後の復員兵の男性中心なコミュニティからは長らく排除されてきたものだった（アレクシエーヴィチ二〇〇八）。

社会主義圏の多くの国は後進地域であったため、

革命と社会主義化は一種の近代化でもあった。極端な例を挙げるならばソ連の北方少数民族は原始時代から封建制や資本主義を経ないで直接に社会主義にいたるものと期待された（Slepkine 1994）。高山論文が指摘するように、社会主義時代の戦争記念碑には、死者の怨念を鎮めるといふ伝統的な死生観を近代化する意味合いもあった。近代的な国民国家が成立する以前に革命にいたった地域の場合には、総力戦における動員がそのまま社会主義的な国民の創設につながっていった。統合された国家の歴史を持たなかったベラルーシでは、戦争における甚大な喪失の記憶が、社会主義時代を経由するなかで、はじめ一つの国民的アイデンティティを育んだとさえいえる。

本特集においてとくに重視したいのは、公的な戦争の記憶とそれに対抗する（あるいは補完する）オルタナティブな記憶の関係性・重層性である。ここで言うオルタナティブとは単に公的な記憶に対する私的な記憶だけを指すのではない。中央に対して地方、支配的民族に対して少数民族、そしてとりわけ男性に対して女性による戦争への眼差しは、オフィシャルな記憶を相対化する視点を提供する。公式の記憶とオルタナティブな記憶の対立は近代国家に

とって珍しいことではない。しかし社会主義圏においては公的なプロパガンダが強力なために、対抗的な記憶は抑圧されて不可視になったり、あるいは権威的な言説に寄生するかたちで表現を得ることもありえる。

もしも愛国心にあふれる若い男性が兵士となって従軍し、ファシストとの戦いで勇敢に活躍したうえで戦死するか、あるいは勝利と共に凱旋するというのが規範的なシナリオであるとするならば、そこから漏れ落ちて見えなくなっている無数の記憶を丹念に拾い集める必要がある。たとえば今井論文はアメリカ軍の捕虜となったベトナム軍兵士がしばしば偏見にさらされ、公的な領域でその記憶にしかるべき注意が払われてこなかったことを指摘している。ドイツ軍の捕虜となったソ連兵士の多くが帰還後にスパイの容疑をうけて収容所送りになったことと比較すれば、ベトナムの事例は寛容にも見えるが、あまりにも（イデオロギー的に）正しい勝利の陰で排除の力学が同じように機能している点は共通している。あるいは越野論文が触れているように、ナチス占領下のベラルーシやウクライナにおける対敵協力者（コラボレーター）は社会主義時代には否定的な評価しか与えられてこなかったが、視点を変えれば

ソ連からの独立のために戦うナショナリストでもありえた。中国における親日派（漢奸）や国民党軍、あるいはアメリカに協力した南ベトナム軍などの記憶もまた比較の対象として興味深い。

戦争の記憶を研究するための題材は多岐にわたる。戦争の記念碑や博物館は公的な記憶を展示するメディアとしての性格が強く（高山・前田論文）、個人の語りであるオーラルヒストリーは私的でオルタナティブな特徴を表しやすい（今井・越野論文）。しかし高山論文が示唆するように、記念碑や博物館も商業主義的なツーリズムの対象となることで意味合いは変化しうるし、個人の語りの中にもパブリックな記憶の影響を見出すことができる。集合的記憶論のアルヴァックスが言うように個人の記憶と集団の記憶は相互依存の関係にある（アルヴァックス一九八九）。戦争をテーマにした芸術作品（映画・舞台芸術・文学・絵画など）は、表現者の立場やスタイルによってどちらの領域にも触れうる。田村論文が扱う中国の革命模範劇はプロパガンダ色の強いジャンルだが、ジェンダーの観点による丁寧な分析によって、実際には作品の内外に複雑な力学が働いていることが明らかにされる。

本企画は旧ソ連・中国・ベトナムの戦争の記憶を



比較することで社会主義文化の共通点と差異を見出すことをねらいとしているが、主として表象研究における比較に留まっている。高山論文・平山論文が示唆しているように、社会主義国相互の文化的な影響関係、たとえばソ連の文化政策が中国やベトナムに及ぼした影響については具体的に踏み込むことはできなかった。より深いレベルで比較を行うためにも、地域研究者間のいっそうの共同研究の推進が望まれる。

●付記

本特集は科学研究費補助金基盤研究B「社会主義文化における戦争のメモリスケープ研究・旧ソ連・中国・ベトナム」(研究代表者、越野剛)によって実施された研究会および現地調査に基づくものである。

●注

\*1 戦争の記憶を含む「戦争社会学」の先行研究については、福岡・野上(二〇一三)が参考になる。旧ソ連における第二次世界大戦の記憶についての代表的な研究としては、Tumarkin(1994)・Weiner(2001)・Oushakine(2009)などが挙げられる。

●参考文献

アルヴァックス、モーリス(一九八九)『集合的記憶』

小関藤一郎訳、行路社。

アレクシエーヴィチ、スヴェトラナ(二〇〇八)『戦争は女の顔をしていない』三浦みどり訳、群像社。

小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編(二〇一〇)『中国における社会主義的近代化——宗教・消費・エスニシティ』勉誠出版。

小長谷有紀・後藤正憲編(二〇一三)『社会主義的近代化の経験——幸せの実現と疎外』明石書店。

塩川伸明(一九九九)『現存した社会主義——リヴァイアサンの素顔』勁草書房。

高山陽子(二〇一〇)『商品化される社会主義——赤いポスターを事例に』小長谷有紀ほか編(二〇一〇)、一二五—一五三頁。

福岡良明・野上元編(二〇一三)『戦争社会学ブックガイド』創元社。

マラーニー、シウン・キングスレイ(二〇〇八)『戦死者とともに生きる——現代ベトナムにおける遺骨と凶事、そして収束する物語』増渕あき子訳、『Quadrante』一〇号、七—三三頁。

Oushakine, Serguei(2009) *The Patriotism of Despair: Nation, War, and Loss in Russia*. Cornell UP.

Oushakine, Serguei(2013) *Remembering in Public: On the Affective Management of History. Ab Imperio* 1: 269-302.

Slezkine, Yuri(1994) *Arctic Mirrors: Russia and the Small Peoples of the North*. Cornell UP.

Tumarkin, Nina (1994) *The Living and the Dead: The Rise and Fall of the Cult of World War II in Russia*. N.Y.: Basic Books.

Weiner, Amir (2001) *Making Sense of War: The Second World War and the Fate of Bolshevik Revolution*. Princeton UP.

●著者紹介●

- ① 氏名……越野剛(こしの・こう)。
- ② 所属・職名……北海道大学スラブ研究センター・准教授。
- ③ 生年・出身地……一九七二年、北海道。
- ④ 専門分野・地域……ロシア・ペラルーシ文学。
- ⑤ 学歴……北海道大学文学部(ロシア文学専攻)、北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学(ロシア文学専攻)。
- ⑥ 職歴……外務省専門調査員(二九歳、二年)、学術振興会特別研究員(三三歳、三年)、大学助教(三八歳、三年)。
- ⑦ 現地滞在経験……モスクワ・ロシア(二四歳、一年、語学留学)、ペラルーシ(二九歳、二年、日本大使館専門調査員)。
- ⑧ 研究方法……主として文学などのテキスト分析だが、ペラルーシやロシアの地方の文献は現地に行かないと手に入らない。現代作家の場合はインタビューも重要である。
- ⑨ 所属学会……日本ロシア文学会、比較文学会、日本スラヴ学研究会。
- ⑩ 研究上の画期……ソ連・東欧の体制変換。ニュース報道などでこの地域に対する関心が高まり、自分も含めて研究者を目指す者が増加した。留学や現地調査が容易になり、これまでアクセスが不可能だった多くの資料を研究に使えるようになったことが大きい。ロシアの中心部だけでなく、ロシア以外の旧ソ連構成共和国や地方、少数民族などの研究もこの二〇年で大幅に充実してきている。
- ⑪ 推薦図書……ドストエフスキー『死の家の記録』(新潮文庫、光文社古典新訳文庫など)。小説家は鋭い観察眼をもったフィロド研究者でもありうることを示した名著。ロシア文学には流刑地や収容所についての優れたルポルタージュが多い。